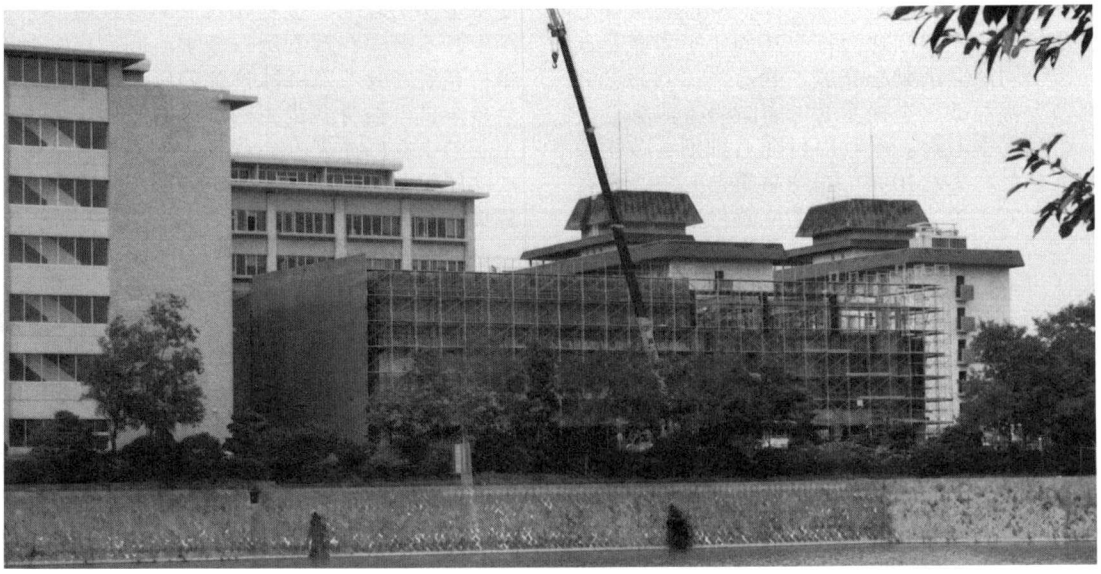
福岡大学医学部同窓会

同　窓　会　会　報

第11号



建設すゝむ救命救急センター（関連記事は25ページ）

福岡大学医学部同窓会創立10周年記念
同窓会の愛称募集

応募要領　１．差込みの葉書（料金受取人払178号）に愛称を書いて提出下さい。
（一枚の葉書に何種類でも可）愛称には簡単な説明を付記して下さい。
葉書表面には応募者氏名、卒業回または学年を忘れないように。
２．締切　平成４年３月末日

応募資格　正会員および準会員

選考要領　応募愛称の中から理事会で選考する。

発　　表　平成４年度第11回総会（創立10周年記念）の席上

表彰並びに賞品　１．Ａ賞　採用愛称応募者の中から抽選で　１名
２．Ｂ賞　同じく　２名
３．Ｃ賞　応募者全員の中から抽選で　10名

第10回総会報告

第10回総会を終えて

会長 山崎　節（1回生）

今年も7月6日に第10回福岡大学医学部同窓会総会を福岡国際ホールにて開催し、会員の皆さんのご協力で無事に終える事が出来ました。

今年は来年の同窓会創立10周年を考慮し、今後の同窓会活動を発展させる為に同窓会会則の大幅な改正を提案しご審議の上決議していただきました。それに付随し細則も改正致しました。また10周年記念事業として、執行部としてメイン事業として位置付けています「パニック・マニュアル」の作成や、名簿の改訂、同窓会の愛称募集などの企画を発表致しました。以上詳細は担当者がこの会報にも書くことになっておりますので、別稿に譲ります。

さて今回の会則改正で現役の学生が準会員になった事で会費の徴収が可能になりました。早速今年の新入生より会費の納入をお願い致しております。事務局の試算によれば、平成6年以降同窓会の財産は収入が頭打ちになり、その後は会員数の増加で通信費等も増え、徐々に目減りしそうな情況です。現在3100万円程度の事業積み立て金が有りますが、平成6年ごろ6500万円になるものの前述のようにその後は事業積み立て金も漸減します。従って早急に1億円以上まで積み立てて、「同窓会基金」を設立したいと考えております。この程度基金があれば、金利収入である程度の余裕が生じると思われるからです。同窓会活動を維持発展させる為には資金の確保が必要で、会員全員の終身会費完納が最低条件ですし、上記のように従来の会費収入のみでは1億円には届かないので、何等かの形での寄付金の募集も必要かと思われます。

一方、来年の創立10周年の事業も推定で880万円程度の事業予算が要るものと予想されています。この分の事業資金は、通常の会費収入による会計には巨額で、概算見通しをも狂わせる可能性があり、結局寄付をお願いしなければ10周年の事業も十分に行えない事になります。現在卒業年度により終身会費に格差が生じていますが、出来ればその差額を埋め合わせる程度の寄付をお願いしたいと考えております。

この秋より来年に懸けて、同窓会よりお願いする事になりますが是非ともご協力の程、宜しくお願い致します。

平成2年度会計報告

副会長（財務）　小金丸　史　隆（3回生）

例年通り総会で平成2年度の収支決算報告を行った。従来通りの収入のほとんどは会員よりの会費と、三井生命代理店収入である。現在、事業積立金として約3100万円あるが、他の新設医科系大学に比べると誠に少ない。現在私共が行っている年間の経常事業は、卒業記念品、医学祭への援助、会報発行などがあるがこれらに対する経常事業費は年間約200万円を必要とする。しかも、同窓会事務局の業務が多様化かつ膨大化しており現在の池田氏一人ではとても手が足りなくなっている。このような観点から将来の財務対策として財政基盤の確立が切にのぞまれるわけであるが、現在の終身会費納入率は、約68％となっており滞納分に対する対策が望まれる。

収入支出決算書　平成２年度

収入の部

項目	金額(円)	摘要
繰越金	1,017,981	
会費収入	9,615,000	入会費 10,000×　7＝70,000 終身会費 20,000×163＝3,260,000　30,000×９＝270,000 35,000× 23＝　805,000　40,000×61＝440,000 50,000× 44＝2,200,000　合計　307件 総会費　5,000×114＝　570,000
寄付金収入	540,000	
代理店収入	1,922,527	
雑収入	501,352	受取利息 379,352　名簿売上 120,000
合計	13,596,860	

支出の部

項目	金額(円)	摘要
給料手当	1,525,000	給料 1,325,000　賞与 200,000
旅費	240,380	通勤旅費 209,760　その他は会議旅費
事務用品費	108,138	
通信費	461,409	電信電話料 72,292　その他は郵便料
印刷費	810,357	会報８・９号 647,355
事業費	1,073,500	卒業記念品13・14回生 644,000　文化発表援助 429,500
公租公課	69,700	法人税（国、県、市）
会議費	808,894	総会 659,032
什器備品費	267,666	ファクシミリ 166,860　カメラ 76,549
雑費	337,456	慶弔 75,900　謝礼 150,100　広告 51,500　その他
事業積立金	5,000,000	
次年度繰越	2,894,360	
合計	13,596,860	

財産目録

事業積立金（定期）	31,470,015円	
定期預金	2,060,000円	
普通預金	814,360円	
器具備品	186,841円	
電話加入権	72,800円	
合計	34,604,016円	増加額　7,921,273円

会則の改正について

理事（総務）　江　下　明　彦　（2回生）

初めに

昨年の総会終了後、総会の内容に例年のごとく変化がなく、出席者数も頭打ちであることへの反省が改めてなされました。加えて同窓会への無関心と同時に、批判や不満の存在をも各役員が再認識するに至りました。そこで、役員会にて同窓会の歩みを振り返った結果、以下の点が問題となりました。

1）誕生当初は諸般の事情もあり、会員の合意だけで自由に一人歩き出来る強い会ではなかった。同窓会自身の問題提起に基づいた活動を行うことも少なく、そのため、活動方針に一貫性を欠く傾向があった。
2）会員各位と役員会との結び付きが薄く、会員の意見が役員会に伝達されにくかった。
3）会長一人に頼りきった会の運営は、役員の業務分担割合も低く、組織力に欠けていた。

以上より、図1のごとく、まず役員会を5つの委員会に分け、業務分担を明確にすることで役員会機能の強化を図りました。また、同時に各委員会間の意見調整の上、同窓会運営に関する短期・中期・長期計画が練られました。

ここにいたり、同窓会運営はひとつの変革期を迎え、フットワークの良い同窓会を目指すためにも現行会則の改正が必要となりました。

新会則誕生までの経緯

現行会則は昭和57年7月3日より施行され、以後、平成元年の小改編のみで現在に至っています。1回生の先生方の御尽力の賜物であり、長い歴史を誇る、素晴らしい現行会則に手を入れることへの責任の重大さを痛感しつつ、新会則作成は始められました。改正に際しては以下の点に主眼がおかれました。

1）同窓会業務内容及び人員の充実に伴い現状に即した内容にする。
2）理事・役員を通すことなく全会員からの意見をより反映させる。
3）同窓会の主たる目的である在校生への後援体制の強化を行う。

総務委員会が中心となり、他大学の会則も参考にしつつ、毎週毎週ミーティングを行う中から第一試案が完成。その後、理事会・役員会で7回にわたり、手を加えられた後、新会則は誕生しました。

会則の変更点

新会則を一括して6ページに示しました。主な変更点は以下のとおりです。

1）第1章　第2条；「地域医療に貢献する」を削除、「母校の発展に寄与する」を追加。
2）第1章　第4条；在学生を準会員とした。在学生への後援を容易ならしめるとともに、在学時よりの同窓意識の高揚を狙ったものである。今回最大の変更点と言える。
　また、名誉会員・特別会員・賛助会員を総則より除き、細則にて定めるところとした。
3）第2章　第6条；役員は正会員の中から選出し総会の承認を得るものとする。準会員を設けたことにより、正会員と明記する必要が生じたことによる。
4）第2章　第7条；従来は医学部長をもって名誉会長としていたが、将来の事を考慮し、設置・人選を特に制限しないようにした。
5）第2章　第8条；役員会を評議員会とした。
6）第2章　第10条；臨時総会を開けるようにした。このことにより理事会ならびに評議員会での決定事項等につき、会員の多く

が検討を必要とすると判断したような場合には、随時これを取り上げることが出来るようになった。

総会でのディスカッション

今年度総会時に会則改正について以上のように報告説明し、以下の質疑応答の後、新会則が承認された。

田口（１）：準会員の権限や権利、同窓会からのアクセスの具体的な方法が明確でない。
→江下「具体的なアプローチは今後の活動、事業を含め最も重要な検討課題」「評議員会等で今後、検討する。」

柴田（４）：賛助会員の条件を明確にすべきだ。
→江下「将来の大口の寄付や大学院生など他大学卒業生の入会希望者などのため具体的な基準を決めず、個々の場合について役員会で柔軟に検討し決定する予定。」

長谷川（２）：会費徴収について
→小金丸、江下「将来平成６年度には赤字が見込まれている。在校生（準会員）からの会費徴収は長年の懸案である。会費徴収に関しては懸案事項として今後の評議員会等での検討を予定しているので御協力頂きたい。」

おわりに

今回同窓会会則の改正と言う重大な局面を迎えたわけですが、今後の同窓会活動を考えるとき、必然的に浮かび上がって来た事柄のように思われます。会長の叱責のもと、総務一同限られた時間内に何とか仕上げたつもりでしたが、総会に於て各会員の熱心な御討論を拝聴するにつけその責任の重さを再確認した次第です。また、各支部の活動も活発になり特に北九州支部の先生方より叱咤激励され、改正後の会則の実施に関してさらなる検討の必要性を感じました。来年20周年を迎え我々役員はおそらく新役員にバトンタッチすることになるでしょうが、この時に美酒を酌交せる様、残された時間を頑張る心構えであります。同窓会に対する皆々様の益々のご鞭撻を宜しくお願いいたします。

理事会における各委員会と担当委員

細則の変更について

理事（総務）　馬渡秀仁　（8回生）

今回の会則の変更に伴い、細則の変更も行われましたので、総会での会則変更の説明および承認と併せて、報告及び説明を行いました。変更の主な要点は下記の通りです。

1．これまで曖昧であった理事会・評議員会・臨時の委員会・総会等に関する事項を明確にした。
2．評議員の枠を広げ、支部およびそれに準じる地域にもこれを置けるようにし、支部の意見をより反映し易い内容とした。
3．監事により会計のみならず同窓会の業務内容も適宜監査出来るようにした。
4．名誉会員の呼称を特別会員とした。

詳しくは前回会報とともに配布した改正細則案を御覧下さい。また、細則に関するお問い合わせ、御意見、御要望は理事、評議員もしくは同窓会事務局へ御一報下さい。

福岡大学医学部同窓会会則

第1章　総　則

（会の名称）
第1条　本会は福岡大学医学部同窓会と称する。
（目的）
第2条　本会は会員相互の親睦を図り、医学の研鑽、および母校の発展に寄与することを目的とする。
（事務局所在地）
第3条　本会事務局は福岡大学医学部内におく。
（会員）
第4条　本会の会員は福岡大学医学部卒業生を正会員、同じく在学生を準会員とする。
2　前項の会員の他、別に細則においてその他の会員を設けることが出来る。
（目的）
第5条　本会は第2条の目的達成のため次の事業を行う。
1．総会の開催
2．会報、名簿の発行
3．その他、理事会において適当と認める事業

第2章　役員及び会議

（役員）
第6条　本会には次の役員をおく。
会長1名、副会長2名、理事、監事及び評議員をそれぞれ若干名。
2　役員は正会員の中から選出し、総会の承認を受けるものとする。
（名誉会長）
第7条　本会に名誉会長をおくことができる。
（会議）
第8条　本会は会長、副会長、理事により理事会を構成する。
2　本会は会長、副会長、理事、監事及び評議員により評議員会を構成する。
（臨時の委員会）
第9条　本会は第5条の目的を達成するため、臨時に委員会を設置することができる。
（総会）
第10条　総会は正会員により構成され、原則として毎年1回開催する。ただし会長の要請、もしくは構成員の十分の一以上の署名による請求があった時は臨時に総会を開催するものとする。

第3章　会　計

（収入）
第11条　本会の運営は次の収入をもって行う。
1．会員の会費
2．事業収益金
3．有志の寄附金、及びその他の補助金等
（会費）
第12条　本会の会員は会費を納入しなければならない。
（会計年度）
第13条　本会の会計年度は、毎年4月1日から翌年3月31日までとする。

第4章　支　部

（支部）
第14条　本会は必要に応じ支部を設けることができる。

第５章　補　則

（細則）

第15条　この会則の実施にあたり、必要な事項は細則で定める。

（会則改正）

第16条　この会則の改正は、評議員会の議を経て総会の承認を得なければならない。

付　則１．この会則は昭和57年７月３日から施行する。

２．この改正会則は平成３年７月６日から施行する。

福岡大学医学部同窓会会則の細則

（会員）

第１条　会則第４条第２項により次の会員を設ける。

１．特別会員　福岡大学医学部・病院の教授及びその職に在った者。

２．賛助会員　本会の趣旨に賛同し、理事会が認めた者。

（役員の選出方法）

第２条　会則第６条の役員の選出方法は次のとおりとする。

１．会長は評議員会が推薦する。

２．副会長は会長が委嘱する。

３．理事は会長が評議員の中から委嘱する。

４．会長、副会長は理事及び評議員とする。

５．監事は会長が委嘱する。

６．評議員は、卒業年度毎に各々２名を各年度の卒業生によって選出するほか、支部及びこれに準ずる地域から若干名を選出する。

支部に準ずる地域は評議員会で定める。

（役員の任期）

第３条　役員の任期は総会から翌々年の総会までの２年間とし、再任を妨げない。ただし欠員を生じた場合における後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

（役員の役務）

第４条　役員の役務は次のとおりとする。

１．会長は本会を代表し、会務を総理する。

２．副会長は会長を補佐し、会長に事故ある時はその職務を代行する。

３．理事は会長を補佐し、会務を分掌する。

４．監事は本会の会計及び業務を監査する。

５．評議員は会員を代表し、評議員会を組織する。

（理事会）

第５条　理事会の任務は次のとおりとする。

１．評議員会に提案する事項の立案

２．評議員会で決定された事項の実行

３．軽微な事項及び緊急を要する事項についての決定と実行

２　理事会は前項第３号の自ら決定した事項について、なるべく速やかに評議員会に報告または承認を得なければならない。

３　理事会は構成員の過半数の出席によって成立し、議事は出席人員の過半数の賛成によって決定される。

（評議員会）

第６条　評議員会は、理事会から提案された次の事項を審議決定する。

１．会則及び細則の改正。

２．事業計画。

３．予算及び決算。

４．その他重要な事項。

２　評議員会で決定された事項は、総会の承認を得なければならない。

３評議員会は監事を除く構成員の過半数の出席（委任出席を含む）によって成立し、議事は監事を除く出席人員の過半数の賛成によって決定される。

（臨時の委員会）

第７条　会則第９条に定める委員会は、評議員会または理事会の承認を得て設置され、会長から委嘱されまたは諮問された事項につき立案審議し、会長に答申する。

２　委員会は構成員の過半数の出席によって成立し、議事は出席人員の過半数の賛成によって決定される。

（総会）

第８条　総会は評議員から提出された事項について審議する。

２　総会における議事は、出席者（委任出席を含む）の過半数の賛成により承認される。

（会費）

第９条　会則第11条に定める会費は次のとおりとする。

１．正会員（準会員である期間を含む）

終身会費として５万円とし、本学入学時に徴収する。

２．特別会員　　無料

３．賛助会員　　１口　２万円

（細則の改正）

第10条　この細則の改正は、理事会の議を経て評議員会の承認を得なければならない。

［付則］

１．この細則は昭和57年７月３日から施行する。

２．この改正細則は平成３年７月６日から施行

する。ただし第2条第5号、評議員に関する規定は平成4年選出の評議員から適用する。

3．この改正細則施行日に現に在学する学生については、第9条の規定に拘らず会費額は4万円とする。

4．この改正細則施行日以前に入会した正会員の会費の額については、第9条の規定に拘らず、それぞれの入会時における規定の額とする。

5．この改正細則施行日を以て、従来の年会費5千円の規定を廃止する。

十周年記念事業について

副会長（事業）　吉田　隆　（2回生）

第一回生が入学した昭和四十七年が、福岡大学医学部創立の年であり、来年度は、福岡大学医学部創立二十周年を迎える事となります。また、約十年前、創立十周年時に、福岡大学医学部同窓会が発足し、同窓会創立十周年目にも当ります。この十年間は、あっという間に過ぎ、同窓会も基礎の年月を経て、新しい組織作りと共に、今一度、同窓会の本質を見直す時期になっています。そこで、同窓会十周年記念事業としては、同窓会々員による“手作りのもの”をとの意見が出て、当直医のためのポケットサイズの研修読本作りに決定致しました。また、各科の同窓会員に執筆を依頼した所、快よく承諾を頂き、高木理事を筆頭に“パニック・マニュアル”の編集が始まっています。医学部創立二十周年記念事業につきましては医学部・病院・同窓会との協同事業は、現時点で具体化しておらず、実現するなら、協力できる可能な範囲にて、参加する予定です。来年度は、同窓会十年目として、いろいろの事業も具体化していく時期となって来る訳ですが、会員数の増加、同窓会の資金の問題などからも考えて、同窓会財務上の問題を少しでも解決するための事業と他方、同窓会々員の役にたつ事業との二つの方向から、考えて行くべきと思います。前者は、現在、保険の代理店しかなく、将来は、危険性の少ない又、経費の安価な事業を検討していきます。後者は、同窓会々員の団体として、又、個人としての利点のあるものを考えていかねばなりません。今後の方針としては、こういった事ですが、現在の人数では、これ以上の実行力は困難であります。今後の同窓会の運営のためには、是非とも、会員の皆様の中からお力をお借りするしかございません。会員の皆様に御参加をお願いして終りにします。

平成4年度総会予告

日　時　平成4年7月11日(土)　時間未定
場　所　福岡国際ホール16階（福岡市天神）
＊来年は同窓会設立10周年、医学部創立20周年記念行事と合わせて行われます。詳しいご案内は会報12号（来年5月発行）でお知らせします。多数の方のご出席を期待しています。

同窓会の事業について

理事（事業）　髙木忠博　（１回生）

これからの同窓会事業計画については、まず20周年記念として卒業生のみの執筆でこれからの研修医を対象とした『パニックマニュアル』と題した小ノートを編集しています。このノートのコンセプトは、我々卒業生が今まで経験した貴重な臨床でのポイント、これを執筆してくれた卒業生個人が今迄心に思っていた母校への思いなど色々な本音の部分が、感じ取られる様な物にしたいと思っています。事業をすると一言で言いますが、その前に絶対にしなければならない事業が有る様に考えます。それは卒業生間の十分に腹を割った会話を基礎にした、我々の為の、母校の為の事業と思います。至極当たり前ですが、では具体的にどのようにして会話を持つのか？その方法を具体的に試行錯誤する事がまず第一で最も大切な同窓会事業と考えます。お互いに十分に体を動かして、真摯な精神で意見を述べて、必ず具体的に『…こうしたらどうであろうか？』という具体案を持って建設的に動いて行く事が、永久的で健全な同窓会事業活動をして行く上で、我々が心の根底に脈々と流さなければならない精神と思います。そして今同窓生がまだ少ない内に出来るだけ**風通しの良い、安心感の在る強い同窓会**を作る事が第一の事業と考えています。とにかく真似ではなく独創性豊かな事業活動をしてみたいと思います。そして『熱い鉄の団結』を実現しましょう。

第10回同窓会総会を終えて

第10回総会幹事　武末佳子　（11回生）

去る７月６日、第10回福岡大学医学部同窓会が恒例の福岡国際ホールで開催されました。今回総務とともに本総会の幹事を仰せつかる機会を得ましたので若干の反省を加え、報告します。

１．幹事

従来は学年毎に順送りで担当していましたが、近年同窓会理事会で業務分担が決まり、各部が始動し始めたため総会の運営は総務の仕事と考えられました。しかし今回は、会則の変更という大きな課題があったため、我々11回生も幹事役の一翼を担うことになりました。

２．日時

いつも取り上げられる幹事最大の悩みは出席者集めです。例年100名前後の出席を頂いていますが、会員総数が毎年100名ずつ増えているのに出席者数が変わらないということは、負の方向に働いていると言えるでしょう。そこで少しでも出席して頂き易いように会場は当分の間固定することにし、開会時間も今年は６時から７時に１時間遅くしてみました。出席者は95名とあまり変わりませんでしたが、当日出席された先生方如何でしたか？少しでも出て来やすかったと感じて頂ければうれしいのですが…。

３．総会

先にも書きましたが、今回は会則の改訂という重要な議題がありました。そこで議長を選出し充分な討議ができるよう考慮しました。７回生の増田雄一先生が選ばれ議事進行しました。詳しい内容は別稿にありますのでそちらを読んで下さい。事前に理事会、役員会で何度も検討されていましたが、数十人で考えることにはやはり限界と偏りがあることは否めません。同窓会員皆様からの意見を多く出

して頂けたことは大変有難い事でした。更に多くの会員の声が聴け、また言える機会・環境を増やすことが今後の会のためにも不可欠だと感じました。

４．懇親会

総会から懇親会と続きます。論議が白熱し時間が15分ほどずれ込みましたが、幹事としてはうれしい誤算です。司会進行役には11回生の別当尚先生が大阪から駆けつけてくれました。恐らく全出席者中最遠来の会員だったと思います。山崎会長の挨拶、三好医学部長のやや長い挨拶及び大学近況報告のあと開宴となりました。

会則の改訂で在学生も準会員となったため、学生10数名も今年から出席しています。彼らからの申し出があり、席上で応援演舞（？）を披露してもらいました。ＯＢの先生からは、学生が軟弱化した、と嘆く声も聞かれましたがそうですか？これが今の学生の一面だと思います。しっかり認識して下さい。そして、この総会がＯＢと学生の交流の場として、今後さらにその役割を増やしていくだろうことを予感しました。

しかし反面、懇親会への恩師の出席が少なかったことは今回の大きな反省点です。もっぱら幹事の不手際によるところが大きいのですが教授たちにもできるだけ多く御出席頂き、交流を深めることは大切な事だと思います。

最後に、幹事として一筆認めましたが、その仕事量は微々たるもので、総務及び事務局の池田さんに頼るところが大きいものでした。紙面をかりてお礼申し上げます。第10回の区切りの総会、そこで会則の変更もなされました。今回の総会は、ずっと先10数年後に振り返ってみたときに、あの時が turning point だったんだと判る、そんな立場に位置しているのではないかと、これは私の勝手な感想です。

増田議長（７回生）

懇親会

演技する学生

別当司会と武末幹事

学年会報告

１回生　グランドケルン　髙木　忠博

１回生は今回は25－６人の集まりでした。２、３回生も同じ会場でしたが集まれば学生気分に戻れますが、毎年段々と中年のオッサンの集まりの感じがしてきたのは、小生だけでしょうか？開業した話、医局の話と、昔と違って何やら生臭い話も最近は聞かれます。共通して皆が頷くのは母校は『今のままじゃいかんばい！』でした。何となく話が湿りがちであったのが気掛かりでした。しかァーし『俺達ァ、ヤルキャァーないばい！』で最後は終わります。皆不惑の40才台に突入しています。実働残り20年！と成りました。自分達の子供が自発的に『是非、福大の医学部に行きたい！』と自分の子供にいわせしめる事が出来たら我らの勝利かもしれません。おっさん達は当日は元気に酔っ払いました。

２回生　グランドケルン　江下　明彦

今年の学年会も例年のごとくグランドケルンで行われました。

総会の方は全体的にやや出席者が少なかったようですが、学年会の方は第１．２．６回生いっしょのフロアーを使用した為、たいへんな賑いでした。

３卒業回生入り乱れての学年会でしたので正確な出席者数は把握できませんでしたが、25名前後の参加は得られたようでした。

学年会も会を重ねると、ほぼ決まったメンバーの出席となりますが、次回より今まで出席なさっておられない方々も是非お出かけ下さって、よもやま話に花を咲かせていただけたらと思います。又特に来年は20周年記念の年ですので出来る限りの御出席を重ねてお願い致します。

さて、「山笠会」の事ですが、井上忠雄会長、吉田隆副会長が中心となり今後の活動を検討中です。なかなかスケジュールが調整出来ずに具体的な催しを皆様に通知出来ておりませんが、近々何らかのイベントを行う予定です。井上隆人世話人より御連絡致しますのでよろしくお願いいたします。

最後に女性会員の方々、子育て家事等お忙しい事でしょうが、来年は旦那様に許可をもらって是非御出席下さいませ。

３回生　グランドケルン　小金丸史隆

我々、花の３回生は卒業10周年が過ぎたが各科の中堅となってそれぞれ忙しい事と思われ、今年は誠にさみしい会であった。

卒業10周年の集まりを企画致しましたが皆様それぞれ大変ご多忙の事で実現できずにいます。是非とも今年は、実行したく思っています。

どうか御参会のほど、宜しくお願いいたします。

５回生　美食歩（ビショップ）占部　嘉男

７月６日、同窓会総会に引続き、天神西通りの「美食歩」にて５回生学年会が、今年は15名の参加により盛大に行われました。今年は遠来の参加が多く、幹事としては嬉しい限りでありました。

普段なかなか会う機会が少ないので、ここで遠来参加者の近況を報告したいと思います。

まず、小笠原君は島根県鹿足郡柿木村にて実家の後を継ぎ地域医療に忙しい毎日との事。香月さんは産業医大第一外科へ行き、現在は門司労災病院勤務中。久保君は町立芦屋中央病院へ就職し、一戸建てのマイホームを手にいれ、いつも愛児の写真を持ち歩くマイホームパパにおさまっているようである。坂本君は昨年父君のご不幸があり、実家の唐津で坂本小児科の後を継いで忙しい毎日のようである。高江政志君は鹿児島県川内市内で高江病院の院長として頑張っているようである。学年会当日も診療が終わった後、ＪＲに乗継ぎ駆けつけて頂いた。

以上卒業後９年も経つと実家の後を継いだり、地元で就職したりと母校に残っている会員は小生を含め数少なくなってきているのが

現状です。そのためにも年一回のこの同窓会総会、学年会に集い、親睦を深めようではありませんか。

来年も御誘い合わせのうえ多数の参加を御待ちしています。

６回生　グランドケルン　東原　秀行　江口　冬樹

同窓会総会にひき続き、西中州の「グランドケルン」にて開催されました。出席者は６名（宮本、東原夫妻、橋本、小笠原、江口）と少なかったが、久しぶりに顔を見た人もいて、また、１回生から４回生までの学年会と同じ場所ということもあって賑やかに、楽しい時間を過ごすことができました。

毎年、学年会の出席者が少なく他の学年会に圧倒されっぱなしですが来年こそは多くの出席者で盛り上がりたいと考えておりますので宜しくお願い致します。

７回生　ENGLAND　井上　隆則

今回も、例年の如く、10名ほどの集まりで、本当に懐かしい同窓生との再会は、実現できなかった。記憶では、大蔵さん、清水さん、澤田さん、伊東、増田、山本、安野（旧姓丸田）それに、大島（安田）、山川（柴田）の女性２名だったと思う。大蔵さんらは、早々と３次会？へ出発され、あとは、ぼつぼつと近況の話になる。丸田くんは、お家の事情で、姓が変わったとかで、養子縁組ではないとの事。近々藤井が結婚する（９月７日）という話をきいて、「先をこされてくやしい」と増田の感想であったが、誰も共感しない。最後に残るのは増田だろうとは７回卒の皆が公に話していることである。本当は、魚住さんやとおるさん、原田、小川にも、ちゃんと来るように言っといたのに、さぼっている。９月７日の藤井の結婚式の方が同窓生が多かった。青木、秋山一家、浅見（豊）、市やん、稲津、近藤、冨田その他サッカー部など、懐かしのメンバーがそろって、市やんのいもがらぼくとを久し振りに聞かせてもらって、楽しい時間を過ごせた。青木は、やっぱりシルベスタースタローンに似ていると言われるし、秋山の娘はやっぱり秋山に似て、やや太り気味だった。ちえぞうも、ちっとも変わらないし、稲津も冨田もパパになっている。近藤は見合いを続けて、近いうちに101回目のプロポーズになるらしい。そして藤井の嫁さんは、当日初公開だったけど、しっかりした明るい人だった。あいつはこれで、さらに太るだろう。その時は、皆でゴルフをしようとか、いやソフトボールを平和台でやろうとか、大口をたたくのだが、いざ総会にあわせて案内しても、集まらないからはじまらない。今度、企画した時は、出てこいよね。余談になるけど、北海道の上泉くんは、元気にしているかなと総会がある頃になると思い出す。たまたま一昨年、彼が膵炎で一命をとりとめた時に北海道で会ってからだけど、不思議なもので、学生の時に特に親しく遊んでたわけでもないのに、卒業して、遠い土地で会うと本当に懐かしくて同窓生なんだなぁとひしひしと感じてしまう。卒業10周年の時くらいには、博多に出ておいでよね。ついでに言うと、逆に福岡に住んどる者の方が、もっと気楽に来れるのに来ないのが気になるところ。小河原よ、ポルシェでサーキット行ってもいいから、来年の７月は、夫婦で同窓会に出てこいよね。来年の２次会も、やっぱりイングランドでする予定なので、皆さん１年１回の機会だから、顔を洗って出てきてちょうだい。

８回生　ENGLAND　馬渡　秀仁

８回生の学年会は７回生・９回生・10回生と合同で中央区大名の『ENGLAND』にて行われました。一気に人数が増えたこともあり、例年にない賑やかな会となりました。また、県外からの参加者も多く、久しぶりの懐かしい話と共に、同窓生の最近の消息も確認できました。さらに今回は同窓会に対する要望や意見も数多く、話題に上り、会員が自由に意見を述べられる場所としての学年会の役割をも再認識させられました。

ところで、ここ数年、毎年、学年会の幹事が持回りで代わっていますが、参加者の顔ぶ

れの方も少しずつ異なっているようです。毎年、いろいろなひとと会えるのはうれしい限りですが、参加者数の方は結果的に伸び悩み気味なのが玉にきずです。来年は学部20周年、同窓会10周年で賑やかに行う予定です。ぜひ、もっと大勢で大いに楽しくやりましょう。

11回生　モダンタイムス　　早田　哲郎

久しぶりに同窓会総会に出席した。二次会には20人ほどの同級生が赤坂のモダンタイムスに集まったが、遠方からの出席者も多く、学生時代の話や近況報告で盛り上がった。卒後４年目でそれぞれ臨床に研究に忙しい時期であるが、違う方面に進んだ友人の話を聞くのは興味深いものがある。今後できるだけ参加していこうと思う。

13回生　ハートランド　　春野　政虎

卒業してはや２年目となりました。それぞれ元気に過されていることと思います。同窓の結婚とか二世誕生の話も耳にするようになってきました。ゆっくりと時間がとれるようになって、また皆で集まってみたいものです。

学年会は、21時より西通り近くのハートランドで行なわれました。今回は７名の参加者です。愛媛から山内さん、九大から田辺さん、福大から、石田さん古川さん黒木さん宮原さん春野です。いったい何人集まるのだろうかと心配してもらったり、めいめいの近況を報告したりしました。ともかく皆忙しいようです。石田・古川は、この後また病院へ帰ってゆきました。２次会は中州のスナックで、カラオケ・ダーツに興じました。

皆様のさらなる御自愛を祈り、では、また。さようなら。

14回生　アッシュ　　池田　耕一

我々14回生の学年会は総会に引き続いて天神のアッシュで行われました。入局して丁度１ケ月が立ち、各々の医局にもなれたころで仕事もだいぶハードになってきたせいか参加者は少く12名で行われました。

１ケ月で経験した症例や、仕事の内容など各々の情報交換の場として楽しい一時を送りました。

今年は参加者が少かったので来年はもっと盛大に行えるよう多数の参加を呼びかけるようにちかいあい会を終了いたしました。

最後にこの学年会の世話ならびに学生時代からずっと我々の世話人的役割だった野村聖君の急逝をこの場をお借りいたしましておくやみ申し上げます。

第85回医師国家試験

第85回医師国家試験（４月６．７日実施）に本学から136人が受検、100人（新卒76人、既卒24人）が合格しました。合格率は73.5％（私立平均78.0％）でした。

［お断り］従来合格者名と研修先を掲載していましたが別紙14回生名簿、名簿訂正と重複いたしますので今号から取りやめました。ご了承下さい。

北九州支部会だより

北九州支部会世話人一同

平成３年４月13日（金）北九州、京筑、筑豊地区（以下北九州地区と略）では、北九州地区同窓会10周年記念として、大学より三好学部長、菊地病院長、山崎同窓会長はじめ、役員の方々をお招きして、支部総会を行い盛会の内に終了することが出来ました。

出席者は、約110名の会員のうち74名（出席率67％）、招待者を含め86名でありました。

御多忙中、御出席していただきました会員の方、大学の先生方、同窓会役員の方々、この紙面をお借りしまして、お礼申し上げます。

さて、この機会に北九州支部の歴史、そして同窓会に対する考えをまとめてみましたので、述べさせていただきます。

北九州支部の歴史は、Ｓ．59年にさかのぼります。当時、北九州に勤務していた数名の福大出身者が、ごく自然に旧交を暖め、近況を報告したり、情報を交換する為に一杯やろうと集まったのが始まりでした。

その後、徐々に当地で開業する人、勤務する人、大学のＯＢの先生方も増加し、Ｓ．62年頃より幹事を決めて、持ち回りにして、例会も年２回行うようになりました。

同窓会活動の、１つの姿は、こういうものであると思います。当時私達も、そのことを深く考えることもなく、飲んで騒ぎ、支部同窓会を重ねていきました。

時代は平成に変り、いつのまにか同窓生も100人を越えるようになり、会を重ねるたびに同窓会に対していろいろな意見を聞くようになりました。

私達、同窓会世話人も、この意見を集約する必要を感じ、先日の同窓会支部総会の時に、１時間ほど討論の時間をもうけました。そこで、話し合われた内容が、以下のようなものであります。

(1) 私達をとりまく医療状況は本当にきびしいものがあります。（医師増加、医療費抑制など etc）医療に競争原理がとり入れられ自己を守るために、医師はますます唯我独尊になりつつあるのではないでしょうか。

医師会離れ、大学医局離れは、もはや社会現象であります。医師の意見をまとめ、指導する立場にあった医師会や大学医局の指導力は、日々低下しているように思います。

このような状況の中で、同窓会はいかなる方向を目指せばよいのでしょうか。

(2) 同窓会が、日々の診療、生活に役立つような組織に出来ないものでしょうか。（例えば、互助会的な性格をもたせて）

(3) 福大卒業生も第一線で働く人が増加し医師として、本当の実力（技量、知識、人格）が、世間から試され始めています。

皆、日々の診療の中で、そのことを強く意識しながら仕事を続けているのではないでしょうか。

こういう状況の中で、医師として精神的なささえになるものは、自分を育ててくれた師であり、大学であり、共に学んだ仲間ではないでしょうか。

そういう意味で、創立20周年、教授交代期を迎えた母校福大医学部の方向もまた私達の将来を決める重大な事象だと思います。

同窓会は、このことにいかに対処すればよいのでしょうか。

以上、(1)(2)(3)固い内容だとは思いますが、先日の北九州地区同窓会支部総会で実際に討論された内容であります。

もちろん明確な答えが出たわけではありま

せん。医学部長、病院長、同窓会長、役員の方々から、それぞれのお立場から御意見をいただき、出席された会員の方々も考えるところを得たのではないかと思います。

同窓会をここまで組織された、本部役員の方々の努力に対しては、本当に敬意を表する次第であります。

しかし、同窓生は皆、まだ自分の実力をつけること、守ることで精一杯なのだとは思います。しかも、この大きな医療のうねりの中では、福大同窓会など小さな存在なのかも知れません。

このような医療状況の中で、10年後、20年後の福大同窓会の発展した姿を考えるならば、一人一人の同窓生が、もう一度原点に帰って同窓会活動について話し合う必要があるのではないでしょうか。

10年後では、もう遅いような気がします。

北九州地区では、このように日々の診療に忙しい中、定期的に支部同窓会を行い少しずつ話し合いが行われ、意見が出され意識が高まりつつあるように思います。

各地の同窓生の皆さんも、どんなことでもいいと思います。まず周辺の同窓生が集まり、飲んで騒いで話し合ってみたらどうでしょうか。

その中で、いろいろな意見を述べ、そして聞くことは、なによりの同窓会活動になるのではないでしょうか。

「まず、集まり、話し合うこと」これが同窓会活動の原点だと思います。

以上のように、私達は同窓会活動を考える上で、支部活動の充実は、急務ではないかと考えております。

これからも、微力ながら福大同窓会発展の為に、北九州地区支部会も頑張っていきたいと思っております。

同窓会本部役員の方に、円滑なる支部活動の御支援をお願い致しまして、乱筆ながら北九州地区支部会よりの御報告とさせていただきます。

田口　純一（１回生）
蛭崎　隆男（２回生）
重田　正義（２回生）

最　終　講　義

来年３月、小野庸教授（放射線医学）及び浅尾学教授（心臓血管外科学）が定年を迎えられます。その両先生の最終講義が次のように行われます。ご都合のつく方はどうぞご聴講下さい。なお同窓会からは恒例にしたがい、感謝の心をこめて花束を贈呈致します。

小　野　教　授

と　き　12月13日（金）３限目　13:20～15:00
ところ　第２中講堂　Ｍ４「じん肺のＸ線診断」

浅　尾　教　授　　未　定

就任のごあいさつ

稲益　建夫助教授の略歴

昭41.	3	九州大学薬学部卒業
41.	4	日本新薬株式会社
48.	9	福岡県衛生公害センター
53.	4	九州大学医学部助手（衛生学）
59.	4	同　講師
63.	11	同　助教授
平3.	4	福岡大学医学部助教授（公衆衛生学）

公衆衛生学教室　稲　益　建　夫

昨年の事ですが、「この頃の若い人は、トラバーユする人が多いんだって！ わたしもトラバーユ出来たらいいんだけど」と言われ、何と相槌をうてばよいのか、はたと困ってしまった事があります。昨今、やたらとカタカナ言語が氾濫していて、その意味が解らないと、つい恰好つけちゃってとか、時代を先取りしているつもりででもいるのかと、見苦しくも僻み根性が出てしまう。この時もそうでしたが、気心のしれた人でもあったので、「何ですか？ そのトラバーユというのは」と尋ねたところ、「転職の事ですよ」という返事。この頃の若者が、時代を先取りしてどんな事をしているのかと、一瞬ジェラシー（嫉妬）を覚えたのでしたが、転職の事であれば、何も僻む事はない。私も、これまでに何回も転職してきたのだからと安心はしましたが、“若者のトラバーユ”というシャレた言葉に、一瞬とはいえ僻み根性が走ったのを思い、私も初老の域に入ったのかと苦々しく反省したのでした。

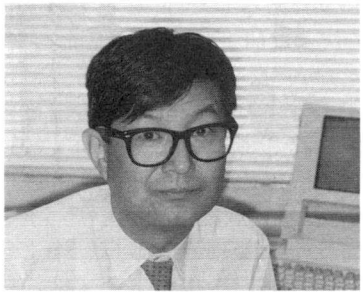
さて、私のトラバーユ歴ですが、大学を出て、民間の製薬会社に5年、福岡県衛生公害センターに地方公務員として5年、そして九大に国家公務員として13年勤め、この4月から福大にやってきました。近頃の若者のトラバーユは、給料の高い方へ、高い方へと移っていくのが普通だと思いますが、私の場合には、わがままな行き方を固執する代償なのか、トラバーユの度毎にサラリーは減少し、今では会社にいる同級の友達との間に大差がついています。しかし、それほど殊更に羨ましく思う事はありません。仕事の中で要求される営利的な配慮、あるいは行政的な配慮に苦心させられた過去の日々に比べれば、はるかに自由な発想が許される大学での研究生活は、わがまま人の私にとっては実に有り難く魅力ある環境だと感じているからです。

この度の転職は、大学から大学への移動で、これまでの転職に比べれば小さな変化と思っています。国立大学と私立大学との違いがどんなところにあるのか、まだ日も浅くよく分かりませんが、不安ながらもこれから私立大学ならではの良さが発見出来るであろうことを楽しみにしています。

私の研究は、これまで“生活環境とその生体影響”という大きなテーマの中で、特に、環境汚染化学物質に中心を置き、それらの微量分析、動物を使った代謝、中毒、発癌などを手がけてきましたが、近頃、もっと身近な生活要素である食事や運動あるいはストレス等に興味がそそられています。転職を機に、この方面への研究に移行すべく準備を進めているところです。

最後に私の趣味の事ですが、職場を転々としたと同じように、趣味の方も長続きしているものはなく、テニス、ハム、音楽鑑賞、ジョギング、山歩きなど、時々思いだしたようにやっている程度で遊びの域を出ていません。

どうぞ、よろしくお願い致します。



神宮　賢一助教授の略歴

昭44.　3　九州大学医学部卒業
　47.　11　同　　附属病院助手（放射線科）
　49.　5　東京女子医科大学附属病院助手
　51.　4　九州大学医学部附属病院助手
平元.　5　同　　講師
　3.　4　福岡大学医学部助教授（放射線医学）

放射線医学教室　神　宮　賢　一

本年４月より勤務しております。今まで、そして今もやっているのは、放射線医学の中でも、特に放射線治療であります。放射線治療には、私の得意とする低線量率照射も有りますが、日常茶飯事に使用しておりますのは、高線量率それも高エネルギー放射線であります。

昭和40年代前半、学園紛争はなやかなりし頃、それが面白くない私は、この高エネルギー放射線を人体ないしは生物以外に照射するとどうなるか、そちらの方に興味が赴きました。と言っても、軌道電子を弾き飛ばすとか、電子対創生とか難しい事は苦手で、もっぱら実利的な方でありました。

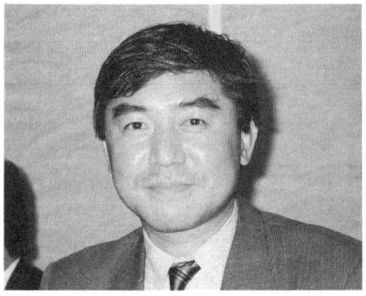
新米医師の私にとって、おお叔父さんにみえた、時の助教授が、この方面にもえらく造詣の深い方で、いろいろと御教授いただきました。真珠に照射すると黒真珠ができて高く売れる、二級酒に照射すると一級酒になり旨い、etc. であります。真珠は無給の身にとっては仕入れが難しく儲けは諦めざるを得ないが、二級酒ならなんとか手に入るから照射して旨くして飲んでみる事にしました。

しかし、いかほど放射線をかけると旨くなるかは教えてもらえませんで、何んでも教えて教えてと言うのは、教えて馬鹿と言うとの御教授のみでありました。

以後は、この線量でどうだろう。この線量ではどうだろうと試飲実験に明け暮れる毎夜でありましたが、実験する度に酔っぱらってしまって、二級酒を一級酒にする正確な放射線量は、今になっても解らずじまいであります。

ご存知の方が有りましたら、御一報下さい。酒造業界に革命を起こしましょう。

これを以てご挨拶に換えます。



瓦林　達比古助教授の略歴

昭49.　3　九州大学医学部卒業
　53.　3　アメリカ、ブラウン大学留学（55.　2まで）
　55.　10　九州大学医学部助手（産婦人科）
　56.　4　九州労災病院産婦人科
　57.　1　佐賀医科大学講師（産婦人科）
平３.　4　福岡大学医学部助教授（産婦人科）

産科婦人科学教室　瓦　林　達比古

昭和23年６月筑後川沿いの田主丸で出生。沢田研二（ジュリー）がその数日あとに出生しています。昭和42年３月福岡県立修猷館高等学校卒業。その頃ビートルズが初来日し、友人が日本武道館での公演を聞きに行きました。翌昭和43年（1968年）九州大学に入学し

ましたが、当時はＦ４ファントム九大構内墜落事故、エンタープライズ佐世保寄港、日米安全保障条約更新（70年安保）、大学管理法案国会審議など多くの社会問題を抱え、その中から“医者は患者を治療して病気発症の舞台である同じ社会へただ帰すことのくり返しだけで良いのか？”との問いかけがあり、医学部闘争が全国の大学に拡がった頃教養部生活を送りました。一時は連日デモに明暮れ、デモ解散後のビールの味に酔い痴れまた議論をするという生活でした。この頃の体験は、我々の世代の人間の心に何らかの形で影響を与え続けているような気がします。その後、フォークソング全盛時代の昭和49年九大医学部卒業、同産婦人科に入局しました。１年間の臨床研修の後大学院入学。５年間の大学院生活の前３年は九大薬理、後の２年は米国Ivyリーグの１つであるロードアイランド州ブラウン大学で快適な研究生活を送りました。帰国後、九大産婦人科、小倉の九州労災病院を経て昭和57年１月より本年３月末まで佐賀医大産婦人科に勤務していました。研究領域は一貫して子宮筋機能の生理、薬理学的解明ですが、臨床的には子宮収縮（陣痛）モニターである外測陣痛計の意義やその改良、子宮収縮促進剤や抑制剤の薬理作用および早産治療法の開発などを手懸けています。最近ではそれらのテーマの展開に生化学的手法や中枢機能の理解も必要であると考え、佐賀大学農芸化学教室や京都工芸繊維大学応用生物学教室との共同研究も進めています。１人でできる事には限りがあります。福大でも色んな領域の先生方と色んなテーマの研究ができればと考えています。宜しくお願い致します。

小野　順子助教授の略歴

昭42.	3	九州大学医学部卒業
45.	4	浜の町病院内科
51.	3	九州大学医学部附属病院助手（第一内科）
53.	9	ワシントン大学医学部病理学教室研究員
56.	7	大分医科大学病院講師（内科第一）
59.	4	福岡大学病院講師（内科第一）
平元.	12	大分医科大学医学部助教授(内科学第一)
3.	4	福岡大学筑紫病院助教授（内科）

筑紫病院内科　小　野　順　子

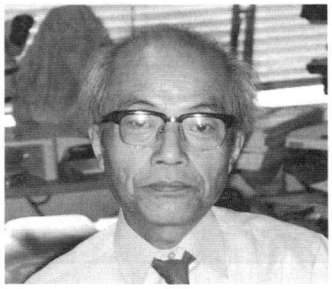
筑紫病院内科に着任し、早いもので半年になろうとしています。当初は早良区から車で通勤するつもりでいましたが、混雑に恐れをなして、バスと急行電車を乗り継いでいます。天神の喧騒を横目に、朝倉街道につきますと、踏切の信号機の音も昔懐かしく、部屋の窓からは緑の田圃が望めます。私はインターン闘争の最中に卒業し、しばらくあちこちで糖尿病の臨床を学んだ後、九大第一内科で膵島培養を用いてインスリンの分泌調節についての実験をしました。その後実験的膵島移植の研究に参加したり、ずっと糖尿病内分泌の分野に携わってきました。九大を離れてからは、どうした事か新設の大学病院に縁がありました。始まりは昭和55年、大分医科大学内科第一に開講２年目、医局員は４名という時期の赴任でした。以後４年間、付属病院開院、病棟増床などを見てきました。内分泌代謝を掲げていました微々たるものでした。研究テーマと臨床の専門分野の関係で、昭和59年より福岡大学第一内科、代謝内分泌グループにお世話になりました。福大は当時既に卒業生も出ており、中間層のスタッフが充実しつつあり、関連病院も増えている時期でした。昭和61年、大分医大内科第一の定員の都合で再び４年間を大分で過ごしました。専門外来の準

備やスタッフの養成、糖尿病患者教育などに加え、診療と研究のレベルの向上と医局員の確保という、これ又新設医大の宿命とも言うべき問題にぶつかりました。しかし、開講10周年ともなりますと徐々にではありますが医局の形も整い、地域医療への寄与もできるようになり、一県一医大構想のもとに設立された新設医大の存在意義もあったかと思えるようになりました。卒業生も成長し発展期に入りましたのを潮に故郷に戻った次第です。なぜこの年令で大学なのか、自分でも疑問に思う事も有りますが、臨床に当り、元来怠惰な性分故、自分の臨床が白日のもとに曝されていないと不安なこと、糖尿病という疾病自体がいろいろな臓器や専門分野にまたがっており、コメディカルも含め、周囲の人々の援助やチームワークが必要であることなどが大きな要因のようです。しかし単に決心がつかないだけなのか、または幻想なのかも知れません。未だ、朝倉街道辺りの人の心が福岡に向いているのか久留米に向いているのか定かではありませんが、この地が３医学部のテリトリーの丁度境界のような所に当たるためでしょうか、いろいろな分野において新鮮例や重篤例に遭遇しています。10年前この病院を買収されるに至った経緯を改めて聞いてみたい気がします。糖尿病内分泌はやや手不足ですが、幸い患者さんにも恵まれ、先生方との交流もスムーズで臨床面での滑り出しはまずまずと思います。内分泌部門は甲状腺疾患を除けばどこの病院でも症例数が少なく、一例一例が症例報告につながる可能性のある分野であり、一方糖尿病はうっかりすると患者さんの数に流されマンネリ化する危険を伴う分野です。研究室が未だ整備されていない筑紫病院で、どの様な臨床研究が出来るかを模索中です。述べましたように診療面での立地条件はよいと思うのですが、七隈は遠く感じられます。研修生はローテートしていますので、それ以外の部門についても人的あるいは物的な交流がもっと自由に出来ればと願っています。新しい世界を求めて若い方々が参画して下さることを心から待っています。

会員寄稿

タンザニアを訪れて

寄生虫学教室　木　船　悌　嗣（特別会員）



昨年末、急に話がまとまり、〔財〕日本国際医療団の委嘱を受けて感染症基礎調査のため、畝博助教授（衛生学）と向野賢治講師（二内科）とともにタンザニア連合共和国へ出張することになった。折しも湾岸戦争たけなわのころで、アフリカ方面の旅行プランは公私ともキャンセルが相次いでいたそうであるが、タンザニアあたりなら多分影響はなかろうということで、今年の１月28日から２月22日までの26日間、タンザニアに赴いた。この種の調査のおおもとのスポンサーは国際協力事業団（ＪＩＣＡ）で、いわゆるＯＤＡに係わる調査計画であり、毎年開発途上国１カ国に調査団を派遣しており、1989年度はラオス、その前年度はパキスタンといった実績がある。

今回は1990年度の実施が遅れて1991年にずれ込んだものである。

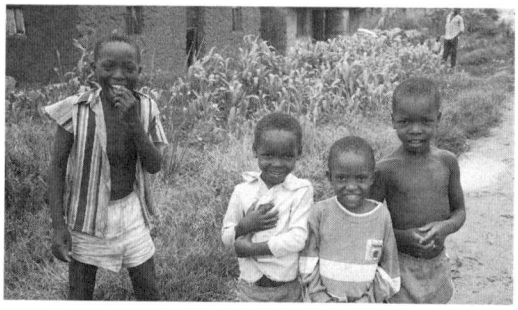
タンザニアの首都ダルエスサラーム（Dar es Salaam と綴るので実際にはダレサラームと聞こえる。以下そのように書く）に着いたときの向野講師の一言「みんなイカンガーに見える」はけだし名言であった。が、いかほどもなく、顔の区別がつくようになるものだと実感した。幸い、ダレサラームにはＪＩＣＡのタンザニア事務所があるので、我々が到

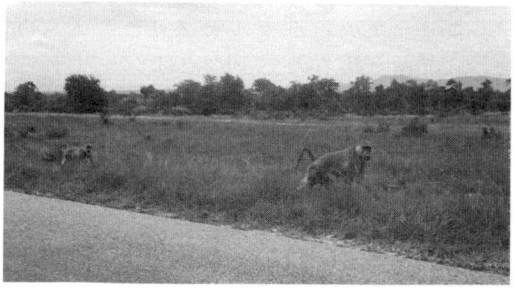
着した時には、調査訪問先とあらかたの日程はすでに組まれていて、おおよそそれに従って動けばよいという段取りが出来ていた。

タンザニアはかってタンガニーカと呼ばれていた大陸部と、3つの島を中心とするザンジバルとが合併して今日のタンザニア連合共和国が出来上がったという経緯がある。そのため、大陸部が20のregionに分かれているのに対し、その1regionにも及ばない狭いザンジバルがなんと5つのregionから成り立っているというアンバランスさであるが、これも歴史のなせるわざであろう。ただ今回の調査対象は大陸部に限られ、ダレサラームのほか、ヴィクトリア湖畔に位置する中規模の町ムワンザと、中部山岳地帯（標高はあまり高くなく1,500m程度）にかこまれたこじんまりした町イリンガ（といってもイリンガ州の州都である）の2カ所を訪れて医療行政についての現状の把握というのが目的であったから、当然医師や保健省のお役人たち、それに先進国の医療援助期間の関係者との談合に終始した。

周知のとおり、タンザニアの北辺には麗峰キリマンジャロが聳え、その近くにはセレンゲッティやンゴロンゴロといった国立自然公園があるが、とても1日や2日で見に行ける所ではなく、わずかにイリンガへの途中にあるミクミ自然公園をかいま見るのが精一杯であった。恐らく、全然野生の動物を見ずに帰国させてはあまりに気の毒だというので車で往復できるイリンガを対象地の1つに選んで下さったのであろう。この自然公園は規模は小さいが、それでも自由に歩き回っている象やキリンは見られたし、サバンナモンキーは車のすぐそばまでやって来て、果物を放り投げてやると取り合いをする姿も目の当たりにすることができた。

調査を終えての感想としては、やはり目下のところエイズが最も重要な感染症であるという印象を強く受けた。どこの町でも村でも、道路の至るところにＵＫＩＭＷＩ（スワヒリ語でエイズを意味する）の予防を呼びかける看板やポスターが見られたが、こと人間の本性に結び付く疾患だけにその防圧は至難のことと思われる。勿論、マラリアを初めとしてビルハルツ住血吸虫やマンソン住血吸虫などの寄生虫疾患も山岳地帯を除く全域に見られ、フィラリア症は東部海岸地方、睡眠病は高原地域に点々と分布しているなど、いわゆる熱帯病の跋扈は想像以上であり、これらの諸疾患の撲滅は容易ではないことをまざまざと感じさせられたことであった。





左上　人懐っこい現地の子供たち（2月10日、ムワンザにて）
上　オフィスの窓に貼られたエイズ予防キャンペーンのポスターさまざま（2月9日、ムワンザのブガンド・メディカル・センターにて）
左下　車の行き交う道路わきまで寄って来て餌を狙うサバンナモンキーの群れ（2月5日、ミクミ自然公園にて）
（いずれも向野講師撮影）

福岡大学医学部卒業生の卒後臨床研修（１）

研修先、研修方法、研修期間、症例数、研修病院、研修科を選んだ理由

公衆衛生学教室　増　田　　登　（１回生）

この調査は、医学部第４学年の衛生・公衆衛生学講義の一環である学生実習として行った。結果を２回に分け簡単に説明する。解析結果の詳細は衛生学・公衆衛生実習報告書第７号を参照されたい。また、調査に際し同窓会・卒業生各位の御協力に対し、ここに改めて深謝致します。

【はじめに】

卒後臨床研修は、医師免許取得後に受ける教育・訓練であり、この研修期間での経験は生涯にわたり診療内容・態度に大きな影響を与える。また、卒後臨床研修は単に医師に対する教育だけでなく、国民医療全体に対しても極めて重要な問題である。これまで、卒後臨床研修に関する調査・研究はなされてはいるが、実際にどのような内容の研修が行なわれているかは明らかでなく、また種々の提言が実行されているとは言い難い。福大医学部は1972年の設立より、卒業生総数は91年現在1500名を超えた。卒業生全員に卒後臨床研修に関する問題の調査を行い検討した。

【対象と方法】

対象は89年３月迄の福大医学部卒業生（１～12回生）全員で、自記式調査法によるアンケートを実施した。11、12回生は調査時臨床研修期間中である。調査用紙の記入は無記名で、調査は90年７月初旬に行った。

【結果と考察】

１．卒業回数別回収率　調査総数は卒業生1250名。調査表回収510人（男449人、女61人）。回収率40.4％。卒業年度別に第１回生が最も高い68.5％で、以下卒業年度と共に低下し、10回生以降は30％以下である。10回生以降は、臨床研修中又は研修が終了間もない時期で、臨床研修の問題に関して研修終了後の臨床経験が乏しく、設問に対する関心が低いことや、研修期間中の問題を比較、検討する余裕がないことなどが回収率が低かった理由と思われる。

２．卒後の臨床研修先　国公私立大学を合わせ大学病院で臨床研修を行ったものは92.5％、福大病院で研修を行ったものが７割を占めている。全国の臨床研修実施状況は、昭和59年度80.1％が大学病院で研修をしており、これに比べると福大卒業生の大学病院での研修率は高い。

大学病院に集中する理由に、歴史的・社会的背景や若い医師間の専門医志向の増加などが大きな理由と考えられている。またごく一部（３名）ではあるが臨床研修を行っていない者がいるが、何らかの医療行為に従事していると考えられる。臨床研修は医師法において努力規定であり義務ではない。全国で0.2％、福大卒業生の0.6％が卒後臨床研修を行っていない。卒後臨床研修は重要かつ必須で、臨床研修（２年間）の義務化が望まれている。これにより研修カリキュラムの確立と評価が可能であると考えられている。

卒業年度別に、福大病院で卒後臨床研修を行う者の比率は卒業年度が近年になる程低下し、11回生は36％と他の大学病院の42％より少なく、国公立大学病院や入局した大学の医局指定病院での研修が増加している。男女別に福大病院での研修率は差がない。女子は国公立大学病院での研修率がやや高く、他の大学病院や医局指定病院での研修は殆どない。

３．臨床研修方法　研修方法は大きく分けて、ストレート方式とローテイト方式に分けられ、さらにローテイト方式には以下の種々の方法がある。(1)全科ローテイト方式、(2)関連科ローテイト方式、(3)必須＋選択ローテイト方式、

(4)診療科内ローテイト方式などがあり、その他これらの中間型などである。全体的にストレート方式のもの6割、ローテイト方式のもの4割で、総合診療方式は1％以下の割合である。

ローテイト方式の内訳は関連科ローテイト45.1％、診療科内ローテイト35.4％とこの2つで8割を占め、全科ローテイトは5.3％と少ない。ローテイションの科数は2科までが42.8％で最多、次いで5科以上18.4％、3科11.4％の順である。

卒業年度別には卒業年度が近年になる程、診療科内ローテイトがやや減りその他が増加する傾向にある。男女別に女子は全科ローテイトはおらず、診療科内ローテイトが8割弱を占める。

研修指定病院の約80％は、ローテイト方式を何らかの形で取り入れている。ストレート方式による臨床研修の弊害が指摘され、厚生省もプライマリー・ケアを中心とした臨床研修としてローテイト方式を提言しているが、ストレート方式は一向に改まる様子はない。この理由は種々あるが、最大の問題は大学病院で好んで実施され、しかも医学生の8割が大学病院での研修を希望することに問題があると指摘されている。

4．研修期間・症例数　臨床研修期間は73.8％のものが18～24ケ月で、1年未満のものは5.7％にすぎない。卒業年度別には卒業年度の増加につれ、研修期間の長いものが多くなる傾向で、学外研修が増加していることも一つの要因と思われる。男女別には大差ない。ローテイト方式の各科平均ローテイト期間は3ケ月以上6ケ月未満が47.0％で最も多い。次いで6ケ月以上22.0％、3ケ月未満13.0％の順である。

受持症例数は研修科、研修病院別に大きく異なるが、50例以上100例未満が最も多く16.6％を占める。次いで100例以上150例未満15.0％、300例以上14.2％の順である。

卒業年度別には卒業年度が増加するにつれ、受持症例数が増加する傾向にある。男女別には女子の症例数不明が4割を超えており明確でないが、男子に比べ症例数は多い傾向にある。卒後間もない10回生以降の症例数不明が35％近くあり、不明の多い原因であった。

5．研修先病院を選んだ理由　臨床研修病院を選んだ最大理由と次の理由を質問した。最大理由としては、①出身大学（福大病院で研修）及び郷里に近い（福大以外で研修）からが、53.1％と半数以上の者があげている。次いで、②指導医、研修内容、カリキュラム、研修設備がいい等、研修そのものの質がいいから17.9％、③最新の医療・設備・医療機器がある等、研修病院の質がいいから15.7％とこの3つで8割以上占めており、研修指定病院であるからや研修医の待遇がよいから等は低い割合である。しかし、これを研修先別にみるとかなり異なっている。福大病院で研修を行ったものは、出身大学であるからが多いのは当然であるが、国公立大学病院で研修を行ったものは、郷里に近いからという理由で7割弱が選んでいる。私立大学病院を選んだものは、研修の質がよいという理由が、郷里に近いからと同じ割合で高く、研修機関の診療の質がいいという理由も多い。医局指定病院で研修したものは、自分で選んだ医局の指定病院での研修であるため、その病院を自分で選んだのかどうかという問題はあるが、出身大学、郷里に近いからが半数以上を占めている。その他は12人と少ないが、研修そのものの質及び診療の質で選んだものが大多数を占める。卒業年度別には、特に卒業年次別に一定の傾向はみられない。男女別には女子は出身大学、郷里に近いからが65.6％を占め最も多く、次いで研修の質が良いが16.4％の順で、親元に近いことが研修病院先を決める大きな理由になっている。次の理由では、③診療の質が良い20.4％、②研修の質が良い17.8％、④指定病院である17.0％の順で多い。

卒後臨床研修がなぜ大学病院に集中するかについては、大学病院と臨床研修指定病院が有する各々の特徴を踏まえた上での考察の結果行われるのではなく、卒後研修後の自らが進む方向を考えた上で、あるいは専門医志向の意識に基づいて研修病院を判断した結果と考えられている。本来の研修制度の目的を達成するためには、臨床例の多い研修指定病院

でより多くの症例に基づく実地修練をする方が望ましく、大学病院と臨床研修指定病院の現有の特徴を生かし、互いに有機的なローテイトを組むことが出来る密接な関連とカリキュラムの確立が今後の重要課題である。

６．研修科を選んだ理由　研修科を選んだ理由では、興味があったからが最も多く58.4％と６割弱のものものが答えている。次いで家業継承が21.7％と多い。私立大学である福大では、医学部学生の親が開業医である割合が在学生の平均で63.4％であり、家業よりも自分の興味で研修科を選んだものが多いことがわかる。卒業年度別には、卒業年度が近年になる程、興味があったからと答えたものの割合が増加する傾向にある。男女別には、女子はやや家業継承（18.0％）が少ない傾向がみられ、先輩の勧めは9.8％と男子に比べ多く、この傾向は６回生までは10％以上と高い。

次回は臨床研修の問題点、望ましい臨床研修、給与、臨床研修の自己評価、等についてのべる。

図 1　卒業回数別調査表回収率(除：回数不明５人)

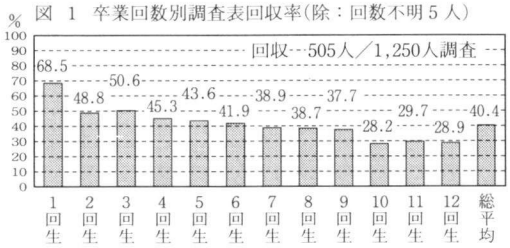


図 2　卒後臨床研修先

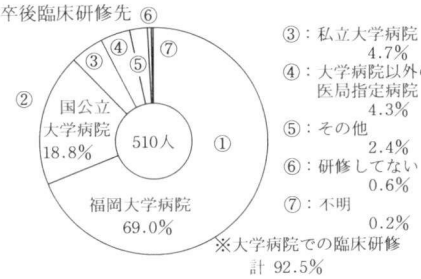


図 3　臨床研修方式

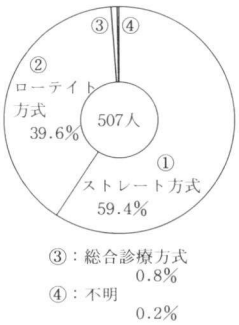


図 4　症例数別割合

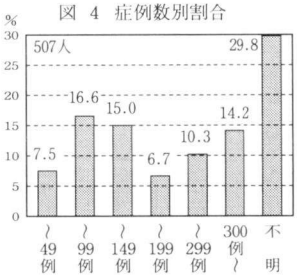


図 6　研修科を選んだ理由

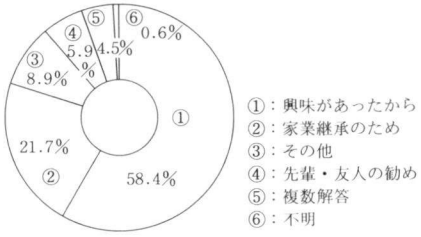
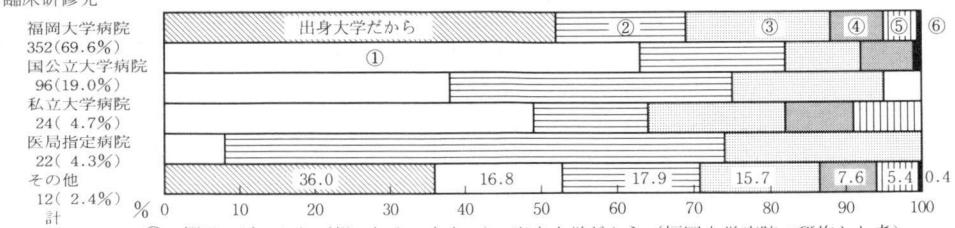


図 5　研修病院を選んだ最大の理由(不明１除く)



① 郷里に近いから（親・知人・本人の）、出身大学だから（福岡大学病院で研修した者）
② 研修そのものの質がよいから（指導医、研修内容、カリキュラム、研修設備がいい、等）
③ 研修機関の診療の質がいいから（最新の医療、最新の設備、医療機器がある、等）
④ その他
⑤ 認定医、専門医研修指定病院であるから（学位取得が可能か等含む）
⑥ 研修医の待遇がよいから（給料、身分、宿舎設備がいい、等）

「試作第1号」は奮闘中

九州大学医学部法医学教室
木　村　恒二郎　（5回生）

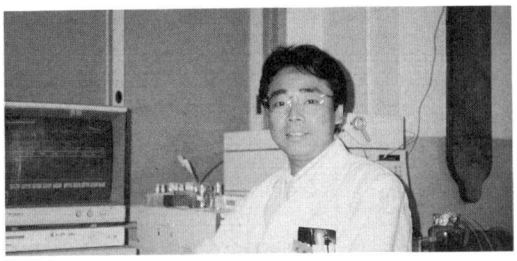
会員の皆様、お元気でしょうか。私は、昭和57年に福大医学部を卒業後、直ちに法医学教室に入局した者です。学生時代、法医学の永田武明教授が私の所属した卓球愛好会の顧問をしておられ、しばしば教室に出入りさせて頂くうちに、急がずに、もう少し基礎医学を見てみたい、真理探究のため献身してみたい、先人の絢爛たる仕事の上に自らの仕事の一部でも加えたい等、今から考えると赤面するような虹にも似た夢に舞い上がって、法医学教室に飛び込んだ次第であります。当時は（現在でもそうでしょうが）医学部出身者で基礎系を選択する人は極めて稀で、大先輩は沢山おられましたが、いわゆる気楽に話せる先輩に担当する人は福大には皆無に近く、何かにつけ「試作第1号」にならざるを得ない状況でした。

福大法医では、広範囲な領域を取り扱う法医学の中でも法中毒学（Forensic Toxicology）、すなわち生体に作用した薬毒物を分離、精製、定性および定量し、その作用程度を明かにし、事件の解明に寄与する学問に焦点を合わせて研究が行われていました（現在も継続中です）。これら一連の研究には化学という手段を使用し、教室の一員となった限りにおいてはこの手段を無視して通るわけにはいきません。しかしながら、化学とはすでに長年遠ざかっていた私にとって、それは大変過酷な毎日でした。学生時代の教科書を読み返しても何となく実感が湧かず落ち込んでいた時、「見よう見まねでもとにかくやって見ろ」と応援してくれたのは有能な教室員の方々でした。多種多様な薬毒物が氾濫する中で、その何れか一つでも資料から検出することの困難さは想像を絶するものがあります。私はとりあえずその中の揮発性物質（ガス体や気化しやすい液体）の検出に力を注ぐことになりました。ところがこの物資が何とも得体の知れない「方」でありまして、対応を誤れば直ちに揮発し、検出の前段階で空中へと放散してしまうのです。“気まぐれな女心”にも似たこの「方」には、私の卓球で養った俊敏性をもってしても到底太刀打ちできるものではありませんでした。途方に暮れていたある時、先輩が「優しく包んで、冷えるのを待て（塩化ビニリデン薄膜に包んで冷凍保存）」と解決法を提示してくれました。こうして比較的早期に“気まぐれな女心”の操縦法を会得した筈でしたが、結婚後8年が経過した今でも、もう一つの“気まぐれな女心”は未だに操縦不能です。この他にも分析結果を得るまでには数々の苦労がありますが、出てきた結果およびその解釈が事件の解明に重大な役割を果たした時の喜びはひとしおで、これがまた次のステップへの鋳型にもなりました。

奇抜なアイデアと卓越したチームワークに恵まれ、楽しい研究生活を送らせて頂いておりましたが、昭和60年1月に永田武明教授が九州大学医学部法医学教授として赴任されたのを期に同年4月私も九大法医に移ることになりました。九大法医は法医学の歴史からみても非常に古い教室で、若干気後れしながら初出勤したのを記憶しています。しかし、中に入ってみると教室員の方々は実に気さくで、私の研究続行を好意的かつ積極的に応援してくれました。歓送迎会を繰り返して出来上がった現在のチームは私にとって今や最高の居場所となっています。さらに、色々な意味で刺激が多いことも喜びの一つで、英語での教室内カンファレンスや分析機器［GC/MS（ガスクロマトグラフィー・質量分析計；微量薬毒物分析のための機器）］の共同使用を通しての他教室員、特に胆汁酸を測定されている第一外科の先生方との真理探究のための会話は、私の鈍感な脳を常に刺激しているように思います。暖かい援助と刺激に支えられながら、学位取得、1年間の海外留学を終え、現在、講師として研究、教育および鑑定と忙しい毎日を過ごしておりますが、これから数年さらに忙しくなりそうです。本年（1991年）9月の日本医用マススペクトル学会、来年10月の国際法中毒学会および再来年4月の日本

法医学会と主催学会が目白押しです。特に、来年10月の国際法中毒学会（TIAFT; The International Association of Forensic Toxicologists）は法中毒学の学会としては名実ともに最高峰で、永田教授を chairman として日本では初めて開催されます。私も過去数回、外国でのこの学会に参加し、強烈な印象を受けてまいりましたが、今回は日本での開催ということで学会そのものの準備もさることながら、未完研究の続行、英語力の上達等々、「試作第１号」は依然として虹を遙か遠くに望みながら、前途多難な日々を送ることになりそうです。

最後に福大医学部ならびに医学部同窓会のさらなる発展をお祈り致しますと同時に、「試作第２号」、「試作第３号」…の出現を期待しペンを置くことと致します。



研究室にて筆者

建設すすむ救命救急センター棟

福岡大学病院北病棟と東病棟にはさまれた救急部の前庭に、いま福岡県下５番目となる救命救急センターの建設が、平成４年４月の竣工を目指して進められている。センター建設の構想は早くから有ったが、福岡県には既に県が計画した４地区にそれぞれセンターが整備されており、一度は断念せざるをえなかったいきさつがある。しかし最近福岡地区での人口の増加に伴い、さらに１つのセンターを増設することが県として計画され、漸く当初の構想が日の目を見るに至ったのである。

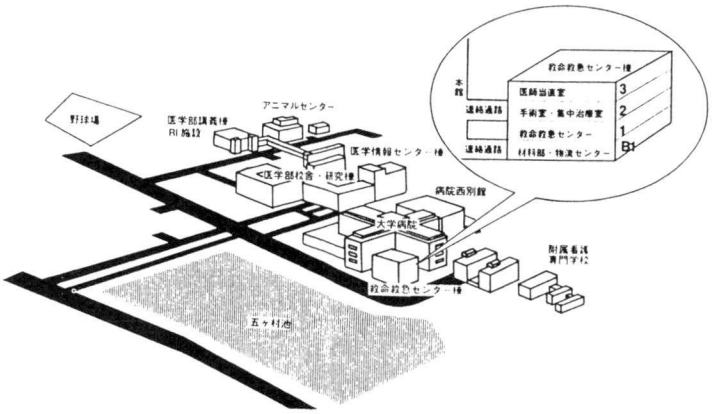
この救命救急センターの完成は、福岡大学病院の機能の充実が得られる事は勿論、地域医療に対する貢献がきわめて大きい。さらに医学部学生の教育、医師の研修面においてもその価値は計り知れないものがある。

センターの設置については、国及び県からの補助も予定されており、また運営に伴う赤字についても若干の補塡が受けられることになっている。

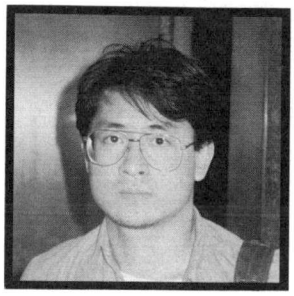
なおこのセンター棟には救命救急センター部分のほか、手術室、医師当直室等も含まれている。

計画の概要は次の通りである。

1．建物の概要
　地上３階、地下１階
　延べ面積　約　6.200㎡
　　（内センター部分は約2.600㎡）
2．病床数　　40床（現救急部保有分10床を含む）
3．職員数　　約90名（うち医師約30名）
4．総事業費　約27億円



―訃　報―



野村　聖先生（14回生）

平成3年8月23日急逝されました。当時福岡大学病院内科第一臨床研修医、有信会評議員、福岡大学医学部同窓会評議員

（連絡先）〒811-32　福岡県宗像郡福間町畦町267
野村匡三郎様　TEL0940-42-0715

野村君を偲ぶ

内科第一　久保田　正樹（14回生）

去る8月23日、1内科研修医、野村聖君が急死いたしました。今年5月に医師国家試験に合格し3ケ月弱の期間、医師として真剣な気持ちで治療にあたっていました。それだけに彼の急死は共に働いていた1内科のスタッフに大きなショックを与えました。野村君をよく知る人はお分かりでしょうが、学生時代はクラスのまとめ役や西医体の委員長として、クラスのみんなはもとより後輩からも慕われ、先輩からも可愛がられていました。僕はそういう公的な仕事の面での彼も尊敬していましたが、酒を飲んでいる時見せる素顔の野村君が好きでした。大学3年の時、福間で行われたキャンプの夜、酔ってジュースの自動販売機を蹴っ飛ばしている彼を見て、なぜか根っからいい奴なんだと感じてしまい、4年で一緒に文化発表週間の仕事をするようになってからも、その気持ちは強くなるばかりでした。恐らくこの気持ちはこれからもずっと続くだろうと思っています。僕は彼に理想の医師像を重ねていましたから、それを確認できなくなったのは本当に残念です。今はただ野村君が安らかに永眠されるのを祈るだけです。

アメリカ旅行を伴にして

外科第一　藤木　健弘（14回生）

「次、俺は像全部入るように撮っちゃってん。」と、自由の女神をバックに彼は少し緊張ぎみにポーズを取って、細かく写し方に注文を付けていました。写真の数だけでも数え切れないほど、横山君と三人でほんの二週間程でしたが、たくさんの思い出を彼も僕らも、初めての海外旅行で作って来ました。電話でホテルを予約して、僕がわからなくて横山君にかわって、それでもわからなくて彼が辞書をひき、それで話しが通じた時の得意気な顔や、そろいのブレザーを買って、やっとの事でチケットを手に入れて観たミュージカル、グランドキャニオンで帰りの飛行機に乗り遅れた事、レンタカーで道に迷った時、一人だけ通りの名前を覚えていて助けてもらった事など、語りつくせない程たくさんの思い出が、なつかしく思われます。

「いつかまた、みんなで来れるやろうか。」とセブンマイルブリッジを帰りながら話していた時、みんなの頭の中は将来の仕事の忙しさで妙に現実的になって、「無理やろうけど、何年か先、酒でも飲みながら、今日の話でもするんやろうね。」と話した様に思います。

ノム（と呼んでいたのですが）と思い出話しはできなくなりましたが、仕事がはじまり、忙しさで忘れていたこの旅行の思いでが、なにかにつけて思い出されます。

6年間、友人達の中に必ず彼がいて、どこへでも一緒に行っていた訳で、そんな場所を歩いたり、知り合いに会ったりするたびに、彼の事を思い出します。おそらく、同級生は今、みんなそんな気持ちだろうと思います。僕自身、公私いろんな事で、迷惑をかけたり、世話してもらったりと、何のお返しもできないままになってしまいました。

「ノム、必ずお前の分もがんばって仕事するからな。」
と、今僕らはみなそう思っています。

今ひとつ彼の死が信じられずに過していますがそれだけ僕らの生活の中に、彼が大きく存在していたんだろうと思います。とりとめもなく書きつづってしまいましたが、野村君の御冥福を心より祈ります。

キャンパスだより

西医体委員長　嶋田　充志（４年）

今年は、４月25日より第30回の九山大会、７月22日より第43回西医体が開催されました。

主だったところで、九山大会で、硬式庭球の女子が優勝、軟式庭球で女子個人戦ダブルス準優勝、水泳では男子が３位に入賞しました。

西医体では、硬式庭球の女子が４位に入賞し、その後の全医体で準優勝をしました。個人におきましては、弓道部で４年の一丸亜矢子が優勝、また、全医体でアーチェリー部の４年、満尾雅彦が男子シングル部門で、同じく４年、宇野博之が男子コンパウンド部門で、堂々の２連覇をはたしました。

さて、皆様も、ご存じとは思いますが、九山大会において、ボート部が事故をおこし２人を亡くすという惨事がありました。この後、安全対策検討会を６月29日に開き、緊急連絡網の設置、クラブのあり方等を話し会いました。決定事項は、①緊急連絡網を設置する。②普段の活動においても、学生証、保険証を持参しておく。③活動届等、あらゆる事を学校側に報告しておく。の３つの点であります。しかし、この決定事項というのは、言えば、消極的な対策の１つであるような気がします。

これから述べますことは、決定事項ではないのですが、積極的な対策であると思っております。それは、今回の事故にしろ、普通、事故というのは、基本的なミスが大半をしめるような気がします。聞いてみますと、各クラブにおいて、専任のコーチがついてくれているところは、一つか二つだったように思われます。要するに、クラブは部長のもと、日々、練習をしていることとなりますが、基本的なことは、どれだけおこなわれているか、疑問なところです。練習の成果という点においても、センスのある人は、それでも上達も速い。けれども、一般人は、学生の内に花をさかせることなく終えてしまうという結果にもなりかねません。センスのある人のいる年は優勝をする、あるいは上位にくいこむ。しかし、それ以外は、まるでダメ、ではもったいないと思います。下を育てて、悪くても、これ以下には下らない、という基盤を作っておかなければならないと思います。このためには、週一回でもいいから、コーチ（専門の）に指導してもらえるような制度が必要であると思います。練習一般から、準備、かたずけ等、あるいは精神面での指導まで。こうすれば、基本的なミスによる事故の減少はもちろん、成績の up もついてくるような気がいたします。この案に賛同いただいて、皆様の御力のもと、実現の方向へと向かうことができるなら幸いと思います。

また、上記のこと以外におきましても、皆様のご支援、並びに、御指導をいただけたらと、願っております。

平成３年度
第43回西日本医科学生総合体育大会結果

バレーボール	予選敗退(男・女)
バスケットボール	予選敗退(男・女)
卓球	予選敗退(男)、決勝トーナメント敗退(女)
バドミントン	予選敗退(男・女)
剣道	決勝トーナメント敗退
空手道	決勝トーナメント敗退(ベスト16)
弓道	予選敗退(男・女)、個人戦女子優勝(M４．一丸)
準硬式野球	１回戦敗退
ラグビー	１回戦敗退
サッカー	２回戦敗退
硬式庭球	２回戦敗退(男) ４位(女)
軟式庭球	予選敗退(男・女)

水　　泳	男子100自由形4位(M4．柴田)、同200リレー4位
ゴ　ル　フ	団体18位

＊全医体　硬式庭球女子　準優勝
（M2．岩下、M4．榊原、M5．八木）
＊全日本医科学生アーチェリー大会
男子シングルス優勝（M4．満尾）
男子コンパウンド優勝（M4．宇野）
＊ＪＩＭＳＡスピーチコンテスト九州大会
ＥＳＳ　準優勝（M1．松田）

全医体体験記

硬式庭球部女子　深水　詩生（4年）

「ややもすると消えてしまいそうな全医体の火を灯し続けたのだという自覚と誇りをもって…」これは全医体硬式庭球部門の責任者の言葉です。なんと西医体からの参加は、福岡大学のみで、正に消え入りそうな火を辛うじて灯したという感じでした。

さて試合のほうも、東西交流という言葉通りののんびりと和やかな雰囲気で進みました。千葉大学、慈恵医科大学と対戦したのですが、九州から遙々と筑波までやって来たからでしょうか。主管の筑波の人達も、福岡大学の選手のプレーに残念がったり、拍手を送ったりと応援してくれました。

応援と言えば、部員全員は参加できなかった為に、西医体の大会のようには賑やかな応援ができなかったのが物足りなく、寂しい思いがしました。やはり西医体ベスト4に入り、全医体への参加資格を得たのは、選手の頑張りに加えて、まわりの部員やＯＢの支えがあったからでしょう。

学生は無気力無感動と言われますが、クラブ活動中を見る限りでは、とんでもありません。立っているのもだるい炎天下で、ボールを追う選手の真剣さ。自分のことのように一喜一憂し、応援する部員の姿。同じ目標に向かい動いているという気持ちがあるからでしょうか。無感動どころか、ここまで没頭していいものかと思うぐらいなのです。

表彰式の会場には、全医体の火を灯し続けた主管の人達の安堵感、選手の人達の力を尽したという満足感が伝わってくるような笑顔があふれていました。同じ医学の道を志す人達だから、またどこかで会う機会があるかもしれない。それだけでも全医体を開催する意義があるように思います。

アーチェリー愛好会よりひとこと

副主将　斉藤　信博（3年）

台風も過ぎ去り、一夜を過ごす毎に秋も深まってまいりましたが、先生先輩方はいかがお過ごしでしょうか。

我がアーチェリー愛好会は今年で活動19年目になります。現在部員は男女含めて14名で、毎年全日本医科学生アーチェリー競技大会と全日本学生フィールドアーチェリー協会全国大会に参加しています。今年は下記のように今までになく良い成績を上げることができました。来年は是非全日本医科学生大会の団体で3位以内に入れるようにと、今から練習に励んでいます。

全日本医科学生アーチェリー大会
男子シングル部門　　優勝
同　コンパウンド部門　　優勝
全日本フィールドアーチェリー大会
男子シングル・フィールド部門　総合1位

さて、実は来年の全日本医科学生大会を我々福岡大学の主幹で開催することになりました。

来年が７回大会というまだ若い大会で、しかも主幹をする我々は初めてという事もあり、右も左も分からないといった状態です。参加者全員 140名にもなるという人達を相手に、本当に今の我々でやって行けるのか非常に不安です。しかし引き受けたからには一生懸命やります。なにとぞご指導ご援助よろしくお願い致します。

“飛　躍”

医学祭実行委員長　満尾　雅彦（４年）

今年も、医学祭（メディカルフェスティバル）を迎える季節となりました。今年から、七隈祭文化発表週間・医学展より医学祭と名称を変えて新しくスタートすることとなりました。そこで、テーマも昨年の“未来につながる今を”から“さらなる飛躍”としました。これには、今まで諸先輩方が築いてこられたものを吸収し、さらに発展させて前進していこうではないかという思いが込められています。

医学祭も十一回目を迎えるにあたって、医学展を通じて、学生が地域住民の方々とふれあう場所として、又、学習してきたことを披露する場所として定着してきつつあります。

最後になりましたが、同窓会の方々には御指導、御理解いただいて大変ありがとうございます。医学祭実行委員会全員より厚く御礼申し上げます。

学長および役職員選挙

平成３年10月13日行われた学長選挙、並びに10月27日行われた役職員選挙で次の方々が選ばれた。なお10月21日の理事会で副学長が選任された。発令は12月１日である。

学　長	宮野　成二	（再　任期４年）	薬学部
副学長	石村　善治	（新　任期２年）	法学部
医学部長	松岡　雄治	（新　任期２年）	生化学第一
病院長	菊池　昌弘	（再　任期２年）	病理学第一

教育職員人事

平成３年10月１日付（講師以上）

〈教授〉

外科学第一	池田　靖洋	昇格
整形外科学	緒方　公介	九大
解剖学第一	宮内　亮輔	大分医大

〈助教授〉

内科学第二	佐々木　淳	昇格
耳鼻咽喉科学	加藤　寿彦	昇格
泌尿器科学	平塚　義治	昇格

〈講師〉

内科第二	石橋　正義	昇格
精神神経科	門田　一法	昇格
心臓外科	今田　達也	昇格（２回生）
泌尿器科	石井　龍	昇格（５回生）
放射線科	北川　晋二	昇格

会議報告

平成3年4月23日（火）19時　役員会
議題　1．清永教授教授就任記念行事について
　　2．会則、細則の変更について
　　3．創立10周年記念行事について
　　4．平成3年度総会について
　　5．有信会評議員について
　　6．その他

平成3年5月28日（火）19時　理事会
議題　1．平成3年度総会について
　　2．10周年記念事業について
　　3．今後の財政見通しについて
　　4．長期マスタープランについて
　　5．その他

平成3年6月18日（火）19時　役員会
議題　1．会則、細則の改正について
　　2．10周年記念事業について
　　3．平成3年度総会について
　　4．長期マスタープランについて
　　5．今後の財政見通しと会費納入率の向上について
　　6．その他

平成3年8月23日（金）19時　理事会
議題　1．会則、細則の改正に伴う今後の対応について
　　2．10周年記念事業について
　　3．将来の財務対策について
　　4．その他

平成3年9月17日（火）19時　理事会
議題　1．10周年記念事業について
　　2．評議員の選出方法について
　　3．その他

編集後記

冷夏とは裏腹に厳しい残暑が続く中、第11号の編集作業を開始した。いつものことながら、11月発刊にしては出足が遅いと御指摘を受けそうであるが、人的、時間的、経済的余裕のないことは今回も同様であった。しかしながら短期間に集約した編集活動で、いつも“前号を凌ぐ会報”をと、会員各位は診療、研究あるいは教育にと忙しい日々の中、東奔西走している次第である。そんな我々にとって、“今度の会報は良かったぜぇー”との一言が何よりも有難い励ましとなり、次への新たなエネルギーになっていることは、編集委員の誰もが感じていることである。同窓会は来年創設10周年を迎え、医学部創設20周年も合わせ、今大きな転機に差し掛かっているようである。編集委員一同、この期に際し情報誌としての同窓会報のより一層の充実を謀り、自他共に“一級の同窓会会報”を目指したいものである。

文責：田中伸之介（5回生）
　　伊東　博巳（7回生）
　　武末　佳子（11回生）

福岡大学医学部同窓会会報第11号

発行日　平成3年11月15日
発行人　山崎　節
編集人　田中　伸之介
発行所　〒814-01
福岡市城南区七隈7-45-1
福岡大学医学部同窓会
電話（FAX）092-865-6353(直通)
092-801-1011(代表)
内線 2798